



平成29年度 日本海マアジ長期漁況予報

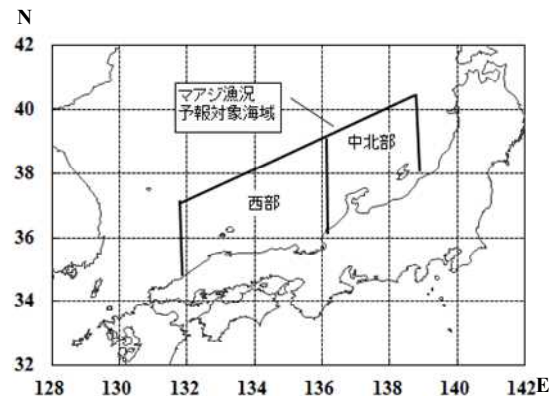
－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成29年5月～9月)のポイント

- ・ 日本海(西部および中北部)の来遊量は前年並
0歳魚は前年並か下回る
1歳魚は前年を上回る
2歳魚は前年を下回る

西部(島根県～福井県)
中北部(石川県～新潟県)

※「前年」は平成28年5月～9月



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所
担当：業務推進部 加藤、江連
資源管理部 上原、松倉
電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950
当資料のホームページ掲載先URL
<http://abchan.fra.go.jp/>

平成29年度 日本海マアジ長期漁況予報

今後の見通し（2017年5月～9月）

対象海域：日本海（西部：島根県～福井県、中北部：石川県～新潟県）

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2017年級群）、1歳魚（2016年級群）、2歳魚（2015年級群）

- ・日本海（西部および中北部）の来遊量は前年並
0歳魚（2017年級群）：前年並か下回る
1歳魚（2016年級群）：前年を上回る
2歳魚（2015年級群）：前年を下回る
- ・西部は1歳魚が主体で、夏以降に0歳魚の割合が増加
- ・中北部は1、2歳魚が主体

※「前年」は2016年5月～9月を示す。

I 資源状態、漁況の経過（2016年4月～2017年3月）および海洋環境について

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジ対馬暖流系群の資源量は、1970年代後半に低位水準であったが、1980年代・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移している。

日本海で漁獲されるマアジは対馬暖流系群の一部であり、その動向は同系群の資源状態と密接に関わっている。日本海における資源の主体は、春季以降に東シナ海から九州西・北部、さらに日本海西部において産卵・ふ化し、0歳魚として対馬暖流に沿って能登半島以北に分布を広げる。越年して1歳魚になると、春季に九州西・北部から日本海西部で漁場を形成し、その後中北部に分布を広げる。その後は地付き群として中北部で漁場を形成する他、東シナ海に移動して漁獲される群もいると考えられる。

2. 漁況の経過

2016年度（2016年4月～2017年3月）における島根県～新潟県の主要港における水揚げ量は31千トン（各府県の速報値等の集計による）であり、2015年度（2015年4月～2016年3月、30

千トン)を上回ったが、近年平均(2011年度~2015年度、37千トン)を下回った(図1)。

日本海のマアジは主にまき網と定置網によって漁獲されている。しかし、定置網の占める割合は概ね20%以下で、まき網の漁獲量の多寡が全漁獲量に大きく影響している(図2)。2016年度におけるまき網の漁獲量(26千トン)は2015年度(22千トン)を上回ったが、近年平均(31千トン)を下回った。各月で比較すると、5月、8月、12月および2月に2015年度を下回ったが、それ以外の月では2015年度を上回った(図3)。一方、定置網の2016年度における漁獲量(6千トン)は2015年度(8千トン)および近年平均(7千トン)を下回った。各月で比較すると、4月および6月を除いた月で2015年度を下回った。

2016年度の西部の漁獲量(主にまき網)は、10月~11月および3月に2015年度を上回ったが、その他の月では2015年度と同程度か下回り、4月および3月で近年平均を上回ったが、その他の月では概ね下回った(図4)。中北部の漁獲量(主に定置網)は、4月~7月は2015年度および近年平均を上回ったが8月以降は下回り、3月に近年平均を上回った(図4)。このようにマアジの漁況はまき網中心の西部では2015年度を上回ったが、定置網中心の中北部で2015年度を下回った。

3. 海洋環境

日本海のマアジの来遊量は、中長期的に対馬暖流域の水温変動と正の対応関係が見られる。期間中6月までの対馬暖流域の50m深水温はやや高めで経過すると予想されており(平成29年度第1回日本海海況予報、日本海区水産研究所)、海洋環境から受けるマアジ漁況への影響は少ないと考えられる。

II 今後の見通しについて

1. 0歳魚(2017年級群)

例年では、今後の日本海西部における漁獲の主体は1歳魚(2016年級群)で、初夏以降0歳魚(2017年級群)の割合が増加する。0歳魚の資源量の指標の一つとなっている4月半ばの好適水温帯面積(東シナ海における着底稚魚の分布量と高い相関が見られる)は2015年、2016年および2017年で同程度であった(平成28年度第2回対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁

海況予報、西海区水産研究所)。後述する1、2歳魚の豊度を考慮すると、0歳魚は前年並か下回る豊度と推測される。

2. 1歳魚（2016年級群）および2歳魚（2015年級群）

2016年5月～7月に日本海西部で実施した表中層トロール調査によるマアジ稚魚の採集数と水温分布から加入量指数を算出した（図5）。今年度1歳になる2016年級群の加入量指数は過去最高であった2014年級群に次ぐ値であり（平成28年度日本海さば類・マアジ・マイワシ・ブリ長期漁況予報、日本海区水産研究所）、2016年度のまき網による漁獲量は、9月～11月にかけて2015年度を上回っていた（図3）。2017年3月には2016年級群が主体となってまき網で漁獲されており、前年3月の漁獲量を超えた。これらのことから、2016年級群は2015年級群を上回る豊度と考えられ、1歳魚の来遊量は前年度を上回ると推察された。2歳魚は、2016年の資源評価結果において前年の2歳魚（2014年級群）より資源量が少ないと推定されること、および、今期の海況はマアジの漁況への影響が少ないと考えられることから、来遊量は前年度を下回ると推察される。

3. 今期の来遊量

以上から、日本海西部・中北部海域のマアジ来遊量は、0歳魚（2017年級群）は前年並か下回る、1歳魚（2016年級群）は前年を上回る、2歳魚（2015年級群）は前年を下回ると予測される。全体として前年並と予測される。

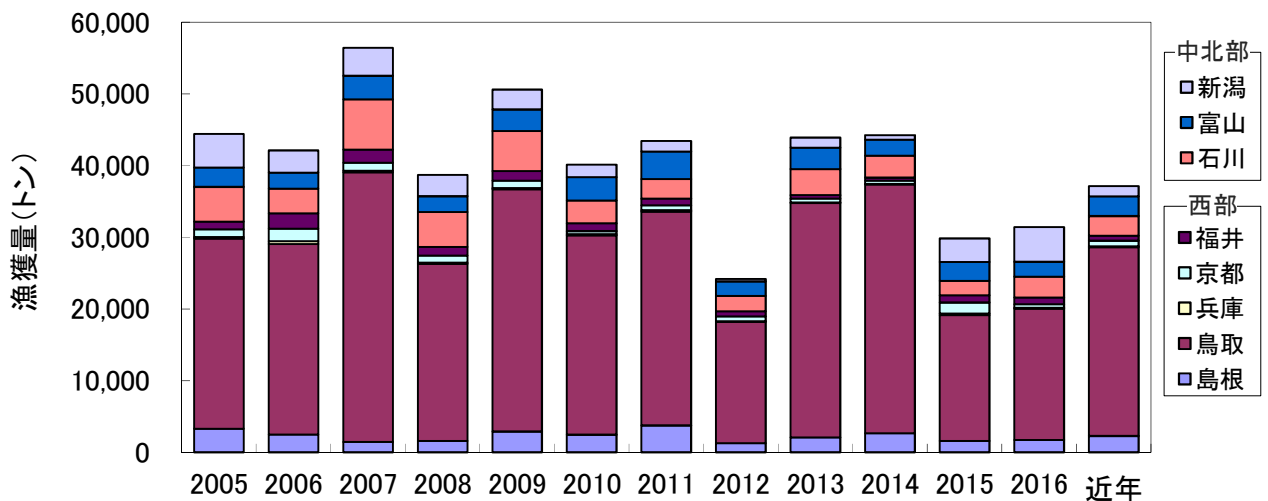


図1 日本海主要港（島根県～新潟県）の水揚げ量の推移（漁期年度の4月～翌年3月）
近年は2011年度～2015年度の平均値を示す

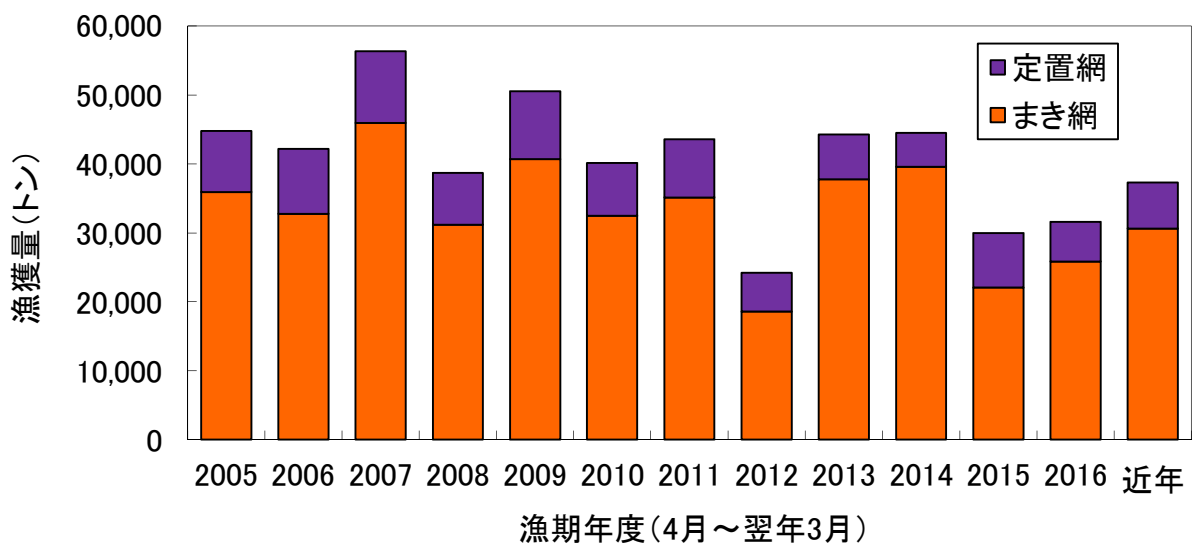


図2 漁業種類別漁獲量の経年変化 (漁期年度は4月～翌年3月)
近年は2011年度～2015年度の平均値を示す

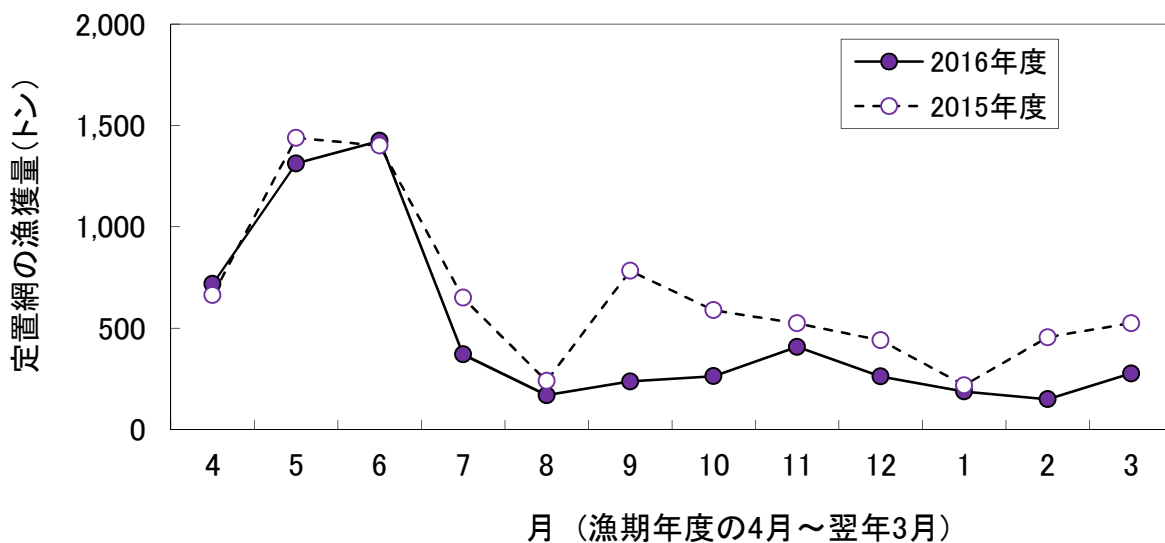
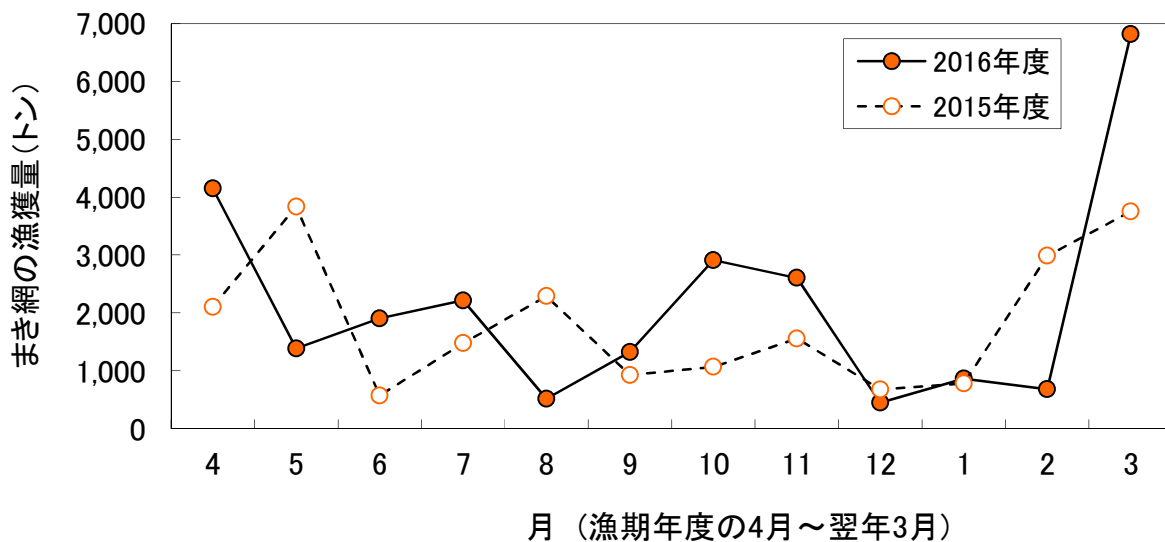


図3 漁業種類別漁獲量の経月変化 (上はまき網、下は定置網)

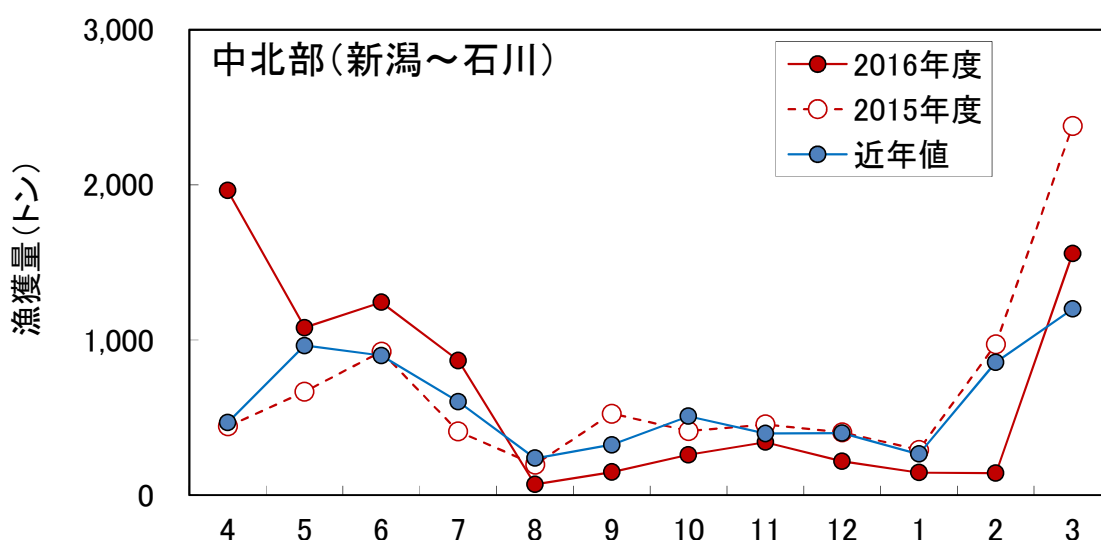
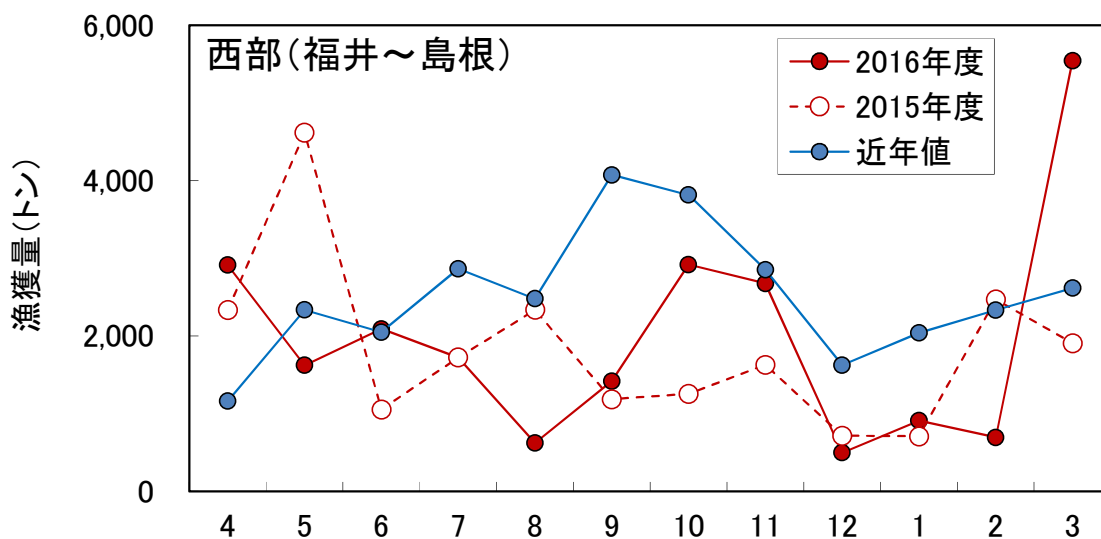
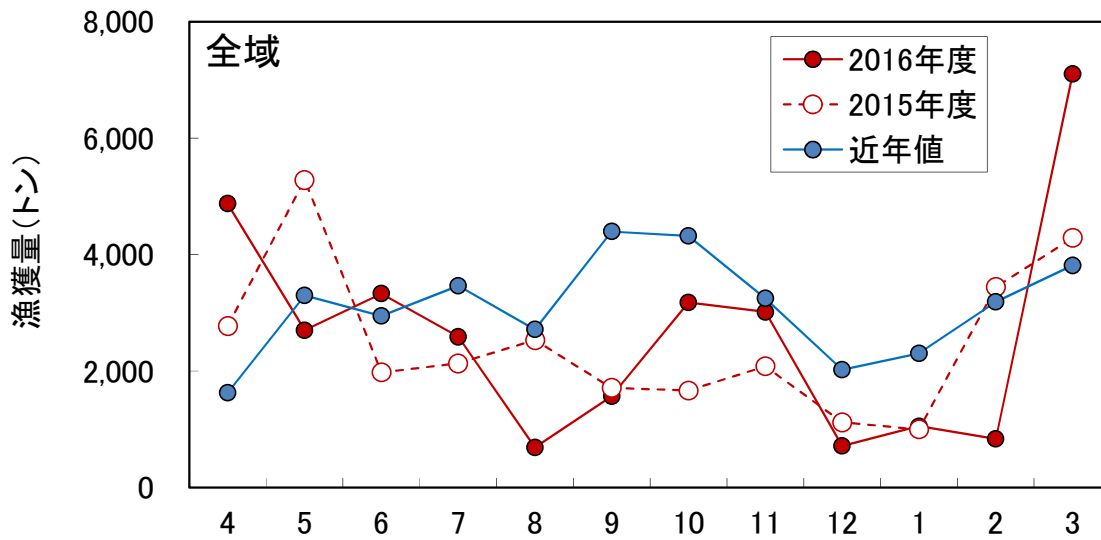


図4 海域別日本海主要港への水揚げの経月変化
近年値は2011年度～2015年度の平均値を示す

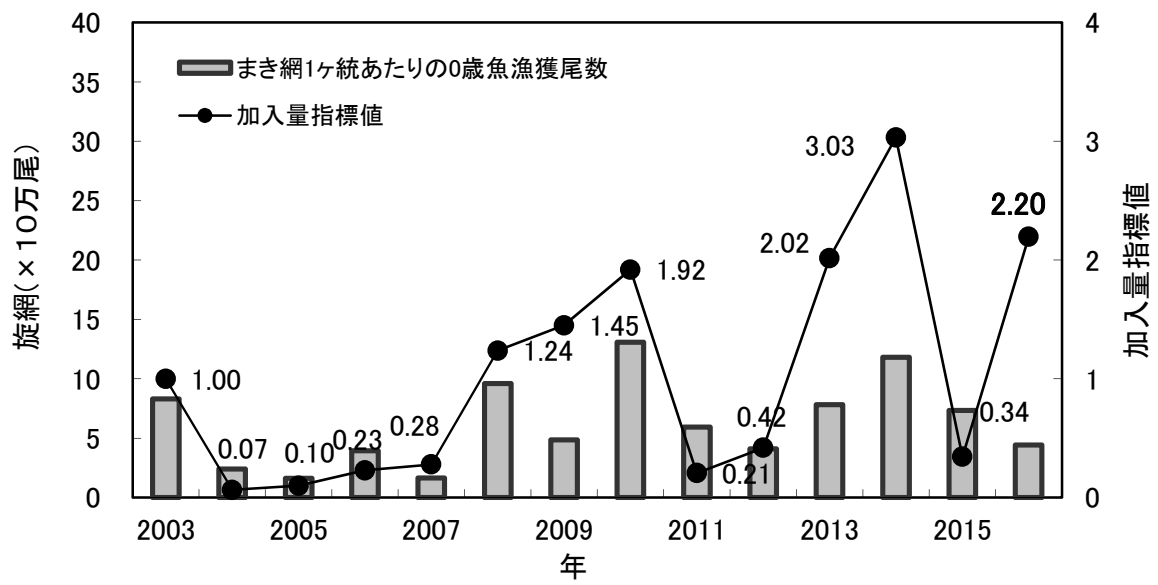


図5 日本海西部海域におけるマアジ加入量指数（2003年を1とした）と境港のまき網1ヶ統あたりの0歳魚漁獲尾数の経年変化

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	京都府農林水産技術センター 海洋センター
秋田県水産振興センター	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
山形県水産試験場	鳥取県水産試験場
新潟県水産海洋研究所	島根県水産技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
石川県水産総合センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所
福井県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所